

働くことは「自己実現」 重度身体障害者の授産施設 京都太陽の園

(財)世界人権問題研究センター 研究第4部長・ジャーナリスト 福田 雅子

京都府船井郡園部町の社会就労センター「セルブ」は重度の身体障害者五十五人と、通所する身体障害者九人が働く授産施設です。

障害が重いため雇用されることが困難な人に必要な訓練を行い、働きながら自活することをめざしたこのセンターは社会福祉法人京都太陽の園によって設立され、今年で二十年を経ました。入所者の年齢は十八歳から六十歳まで、朝九時から夕方四時三十分までの仕事場は障害の性質や、働く人の希望もいれて七つのグループに分かれています。商品の値札つけや宣伝用パンフレットの袋詰めのコナーでは宅配便の糊付け

の部分折る作業を助けるために、板目紙でつくった枠を利用して手際よい作業が進みます。近隣の企業が発注を続けている電気洗濯機のホースにフックをつける仕事も二十五本を正確にまとめる仕掛けが工夫されています。西陣の織り物工場に働いてきた女性は股関節を痛めていて電動の車椅子での作業です。値札につけた糸を検品しながら、「ここは、まわりに山があつて空気がいいし、友だちもでき、仕事もできて、それが生き甲斐」と。夫が亡くなって不安な日々を送ってきたと話す別の女性は「成人した男・女ふたりの子どもが冬休みには別の施設から帰ってくる。親子で過すこの時だけは働けないけ



■「セルブ」で働く人々

どね」。また七宝焼きのコーナーでは風船をテーマにした創作の額絵などで個展も開かれているという女性が、ピンセットで黒いブローチに銀箔を張る細やかな過程に熱中されていました。印刷コーナーは年末年始をひかえて活気づいています。入所者が自ら進んで障害を克服し、社会経済活動に参加することができるように必要な訓練を行う。授産の目的をこう掲げる京都太陽の園も二十年の歳月を経て高齢化と障害の重度化に直面しています。施設長の西井久和さんは意欲をもつて働く人たちとともに居て、「七十歳を過ぎて働くことがいいのかどうかとふと問い返しながら、「やはり働くことは、すべての人にとって大切な自己実現です」ときっぱり結びました。